

## 會



## 報

1966年9月

255

日本山岳会

## 白馬岳初期登山者・その外

武田久吉

1

日本北アルプスの中で、恐らく一番人気があるかと思われる白馬岳は、いつ頃から私達の間に知られるようになったものかと、折々尋ねられることがある。

この山がどういう動機で初めて登られたか。信仰登山か科学的研究が、その当時の登山者の主な目的であった時代の事として、その何れかであったとは想像がつく。

ところが、白馬岳には、これぞという神仏は祀られていないし、白馬講などという講もなかったのだから、信仰登山が中心でないことは確かである。それでは、土地の人は何の為に登ったのだろうかという、昔の事を知っている故老は皆物故して、尋ねるに由ない現状である。

本曾の御嶽とか乗鞍岳、又は加賀の白山のような、信仰の山では雷鳥を見れば之を神聖視して、霊鳥などとして敬まう風習が生じたに係わらず、白馬岳あたりでは、下界の鳥とは違うという所から、その羽で蚕を掃き立てれば、よく当るなどという迷信はあったにせよ、特に尊崇するということは、無かったようである。

また昔は白馬連山は、山麓民の生活と密接な関係が無かったものと見えて、「西山」という名で総称

しただけで、余り細かい小字はつけなかったように思われる。尤も清水谷の上流に「立壁」という洞窟という程でもないか、泊り場があるから、恐らく越中の猟師は熊狩りに入ったこともあったのである。現に一九〇五年八月に、越中から猟師が登って来たこともあった。

私達が最初に登った頃には、今誰でも手にすることの出来る五万分の一の地形図の如きは無くて、参謀本部の中にあつた陸地測量部で出版した、二十万分之一の「高山」というのしかなく「明治二十三年輯製製版同三十四年修正」とあつて、而も発行月が「三十二年二月二十三日印刷、二月二十八日発行」とある。他では、入手が前記の輯製図ほど容易ではなかったが、農商務省地質調査所発行の「富山図幅」と呼ばれる二十万分之一の実測まがいの図（地形測量中郡瀬野、製図寺本種義とある）があつた。その二つの地図には、白馬岳の名が印刷してあるから、この名は少なくとも、明治二十三年には、通用していたに違いない。

白馬という名は、本来代馬と書くのが正しいので、誰か一人こういう誤りを犯すと、後の者は、そ

れとは知らずに、それを踏襲するものである。

田の荒代を掻く頃に、山上に馬の形が現われるから、代馬であり而もその馬は白い残雪が馬の形にとけて、黒い馬が現われるのであるから、「白馬」の文字は事実上反する訳で、余程の非常識でなければ、斯様な文字を用いられないのに無智ほど恐ろしいものはない。

この馬の形が現われること、そして山のどの辺にいつ頃現われるかは、田辺和雄君が詳しく研究して、その著『山とお花畑』の第一巻に詳説しているから、就いて見られれば幸である。

白馬岳紹介の最初の記文が「白馬山」と書いてあつたため、私達は永い間白馬山と呼んだが、山の貫禄からしても岳が相当であろう。

それでは、その最初の記文は何時頃どこに発表されたか、そして主としてどういう人達が登ったものかを知ることは、この山の登山史上必要なことであるが、それと詳しく追及することは、今となつては容易でない。只一つの頼みは、白馬館の前身である四ツ屋の余旅館の宿帳であるが、約七十年前のそれは恐らく保存されてないのではあるまいか。今茲に記すものは前世紀の終りから、今世紀の初期に亘る文献から、創期登山者の姓名を拾い出して、その目的とか、登山経路などの明らかなものは、それをも付け加えたものだ

が、山岳会の結成前後の信仰以外の登山がどんなものであつたかの、一面をも知るすがたとなるかとも考えて、敢て筆を執つたものである。

明治三十一年

(一八九八年) 八

月十五日、当時長

野果大町小学校長

(後長野高等学校

長)であつた河野

齡蔵氏は、岡田邦

松氏及び他の友人

一名を伴ひ、案内

者をつれて、山麓

北城村(現白馬村)

四ツ屋から大雪溪

を経て山頂に登り

その以前に測量の

為に、測量部員宿

泊用として建設さ

れた石室に泊り、

翌十六日午前九時

石室を出発し、杓

子岳を越えて鍾ヶ

岳に登り、岳ノ湯

(今謂う鍾温泉)

に下つて仮泊し、

翌十七日四ツ屋に

帰着した。登山の

目的は鳥類の研究

目次は次頁に



にあったと云う。恐らくその頃多数棲息していた雷鳥の研究が主なものではなかったかと思われる。この登山の記事は、ウルップソウその他の珍稀な高山植物の産することの報告と共に『植物学雑誌』第十四巻第六十一号（明治三十三年七月二十日発行）に掲載されている。これが私達の目にふれたこの山に関する最初の記事で、それ迄は、東京の人達は、この山の名すら知ってはいなかった。

明治三十三年（一九〇〇年）八月下旬、当時理科大学植物学教室の助手であった理学士矢部吉禎氏（後の女子高等師範学校教授、理学博士）は、右の報告に基き、東京から信越線によって長野へ、そこから中条、高府、小根山、千見、美麻、青貝、深沢、塩島を経て四ツ屋に達し、茲から登山した（案内人は恐らく小林区署の巡視の丸山常吉又はその配下の者）が、一日二夜にわたる暴風雨に悩まされ、十分に採集出来ずして退却した。この記事は『植物学雑誌』第十四巻第六十四号に載る。

明治三十四年（一九〇一年）八月、長野師範学校教諭矢部三郎氏登山。目的は多分植物採集にあったことかと思われるが、詳細不明。

明治三十五年（一九〇二年）八月二十日、帝大教授山崎直方氏は、学生大井上義親氏（後の地質調査所長）を伴って登山。『信濃博物

学雑誌』第三号（明治三十五年十二月十五日発行）に次の記事がある。即ち「山崎氏は諏訪教育会の囑託に応じて、諏訪の地質及び有用鉱物に関する実地指導及び講演をなし、白馬岳に上りて、氷河の遺跡を発見したりと云う。さきに我が河野氏が去る二十六年中、信濃教育会雑誌に報道せしものなるべし」。この雑誌にどの様な報道が載っているかは、目下のところ明らかにし難い。又山崎博士の報文は『地学雑誌』一九〇二年号三九〇—三九八頁に載るといふ。

同年同月某日、伊藤三氏登山。同月二十五日、前記の矢部氏は山麓細野の丸山常吉外一名の夫を連れて登山。同氏は篠ノ井線の一駅赤科に下車、乗合馬車に搭じて池田町に到って一泊。翌日又馬車で大町へ、更に北城行きの馬車によって四ツ屋に達したのである。二十五日には白馬尻に仮泊し、二十六日頂上に上り、二十七日に下山した。『植物学雑誌』第十六巻第八十八、八十九号参照。

同氏の採集の結果は、英文を以て『植物学雑誌』第十七巻第九十二号に発表されている。

同月二十九日、折井最一氏登山。同氏は白馬岳の記事を『信濃博物学雑誌』第八号（明治三十六年十二月二十五日発行）及び第九号（翌年三月二十日発行）に、図版一葉を附して発表した。

明治三十六年（一九〇三年）八

月二十日、山草家子爵青木信光、弁護士城敷数（後の京城覆審法院長）の両氏は、日光在住の画家五百城文哉氏を伴い、入夫数名を従え、細野経由で登山、山頂に滞在三日。鍾ヶ岳に往復するに、路なき為、一日を要したという。この記事は城氏の筆によって『日本園芸会雑誌』に掲載されたが、その巻号は目下不明。

明治三十七年（一九〇四年）八月、長野中学校教諭志村寛（号鳥嶺）氏細野経由で登山。これ以前に己に二回登山したというが、その年月日は不明。志村氏の第一回の登山に際しては、一行は入夫とも四名で、岳ノ湯に下るに四時間を要し、而も茲に泊らずして、二子岩まで下って野営したという。『山岳』第二年、第一号）

同年同月（？）帝大日光植物分園の管理人望月直義氏登山。山頂の小屋が破損して宿泊不可能な為、頂上の測量檣の下に、四方をハイマツで囲んで仮泊したという。

この年には、『信濃博物学雑誌』第十二号（明治三十七年十月二十五日発行）によると、矢崎斉知郎、上野卯三郎、春原平八郎、倉島賢次郎氏や、仙台の第二高等学校教授安田篤氏も登山したというが、月日は不明。尚旅舎余屋の宿帳によると、この年に、大学教員寺崎留吉」と名乗る人物も登山したらしく、この姓名は八ヶ岳の本沢温泉の明治三十八年度の宿帳に

もつけてあるというが、日本中学校教諭の寺崎留吉氏と同名同姓であり、『大学一覽』にはこの名は載っていないのは奇怪である。

明治三十八年（一九〇五年）は雨の多い年であった。それにも拘らず、私の山旅の回数最高で、四月一日から十月二十八日迄に、十ヶ国の山地に採集旅行を行ない、最後に、山岳会の結成にまで漕ぎつけたのであった。（以下次号）

## 目次

- 白馬岳初期登山者・その外（一） 武田久吉……一
- 聖岳名考……山本朋三郎……三
- 青年の時から今への山やま 塩田輔雄……四
- 北沢基幸氏の憶い出 岩永信雄……四
- 野中至翁の富士登山 永原輝雄……四
- 図書……アルビニズム・四、五月号 五
- 受入図書 六
- 会務報告 昭和四一年度支部長会議 七
- 昭和一四一年度除籍者……七
- 昭和一四一年度除籍者……七
- ◇ 七
- 雑報 T・G・ブラウン氏逝く……二
- アラスカ通信……HAC……三
- 次号には武田久吉氏の「白馬岳」の続き（完）と久し振りに初見一雄氏の書いた「追員の銀光」という長編隨筆その他が掲載される予定。

■ G・T・ブラウン逝く ■  
近着の A.J. 1966-1 (May) の追悼記の中に私達は遂に Thomas Graham Brown (March 27, 1882 ~ October 28, 1965) の名を見ることになった。余りに著名な人なのでここに紹介するの気がひけるが、その故にこそ一応は書いておかなければなるまい。

一九〇三年、Edinburgh 大学卒業、Wales 大学生理学教授(1920~1947)、Royal Society 会員(1927~)、AC 会員(1936~)。

登山を始めたのは三〇才過ぎてからで、アルプスでの活動を開始したのは四二才の時からである。

彼は死ぬ前に、もし A.J. に自分の追悼記を載せることがあったら、登山記録だけにしてくれといふたそうだが、1924~1938 まいに、A.J. に書いてあるだけでも七七の普通以上の山行がある。海外では一九三四年にハウストンと一緒に Foraker の初登、三六六年に Nanda Devi (七〇〇〇 m まい)、三八年に Masherum (六四〇〇 m まい) という記録がある。

彼の登攀で最も有名なのは、モン・ブランの Brenna 側の多くの記録である。

1948~1952 (66~70 才) の間にメンヒその他のガイドレス登攀をやっている。

彼は難しい新ルートの開拓ばかりでなく、一方、登攀史家として優れていた。私は彼の著書として次の二つを持つてゐるが、いづれも後世に残るべき名著と思う。

「Brenna」, London 1944 (5版 1946) これはあとの 86 頁が全部写真。  
「The First Ascent of Mt. Blanc」, London, 1957 これは de Beer との共著、AC 百年記念出版物。(吉沢)



聖岳名称考

山本朋三郎

南アルプスの聖岳は何故に聖岳と呼ばれるのか。光岳、赤石岳、塩見岳などは解説し易い。以前は小生も聖沢の形態から、むしろ強引な解釈をして来たが、最近、これは誤りである事が判つた。理由は後述する。

多くの場合、沢の名称が先に冠せられ、其次に其の沢名に近い名前が源流流の山につけられて來ている。何何沢の頭、何何岳。此の考えでゆくと、聖岳の前に聖沢が名付けられた事になる。一般論的に推考してみると、地形が曲りくねつた聖沢にまず目がいく。

曲つて居る事に関連有る名詞、形容詞、動詞をまづ探すことになる。「ひじり」と言う日本語を曲つてゐる、折れてゐる、と言つた意味から探して誰しも第一に思い当るのは、「ひじ」である。

「ひじ」とは腕の関節の折れ曲つた外側の部分を言い、枕草子による『ひじ折りたる廊』などと使われている。

この名詞の「ひじ」を動詞に活用させると、「ひじ・る」の動詞が出来るが、一般的にこの場合の「ひじ・る」とは、「ひじり」の名詞から、ひじりる↓ひじ・るに変化した動詞である。では此の動詞の基の「ひじり」とは何か。

周知の如く、**「ひじり」** **「聖、とは**  
**聖人、高僧、通ぜざる無き人（不通無**

的」とは僧侶らしくなる、出家するとの意味である。斯様を考える、どうしても 聖岳が判らなくなってしまう。河川は多くの場合、場所の名前が多く使用される。富士太郎、淀川、坂東太郎の様に。大井川の上流の名称は昔は、猪川であった。此の猪川の更には上流の聖沢の、ひじりが土地、場所からの名称でない事は前述の通りである。井川が猪川で言われたのは、猪の多い山村を流れる川であるからこう呼ばれていたのである。

更に方向を変えて、駿河なり信州の山人が聖岳と呼んだとして、方言から考へてみる。全国の方言を何の意味もなく探すと、「ひじり」と發音する方言は可成り有るが、其の意味する處は全然、聖岳と遠いものが多い。一例に、前述の「ひじり」の他に、同じ「ひじり」でも、奄美大島では根、めえじり、の事を言い、京都ではおこるめえぎの事である。福井県坂井郡辺りでは台所の流しの事を意味する。聖岳のひじりの發音に近い方言が駿河地方に無かつたか、と探すと、静岡県全般の方言として、「ひじろい」、「ひじくなる」がある。然し此の方言は、前者は眩しであり、後者はうづくまるの意味である。

後者のひじくなるがひじりに転化したのではないかと考えてみるが、「ひじくなる」の後半分の「くなる」はどいうしても「り」には転化し得ない。「ひじくなる」のうづくるの意が、聖沢の曲折している型状として表現されたのではないかも知るが、方言のつづめ方に大きな無理が有る。

前にもふれた、ひじを動詞に活用させた、「ひじる」曲る「ゆがむ」との方言から聖の名称を考えがちであるがこの「ひじ・る」の方言は、九州・福岡県朝倉郡や対馬地方の方言であり、

静岡県では使用しておらず、大井川中流の本川根地方では、ひじるゝに類する方言は、ひじろゝであり意味はいろりの事である。九州や対馬から出稼の入夫が聖沢の地形を見て、ひじる沢ゝ曲つた沢ゝ聖沢と名付けた事も考えられない。

以上の様に聖岳、聖沢の名称は、最初、沢の名称が出来て、其の上流の山頂の名が起きた、一般法でなく、逆に山頂名の聖岳が冠せられて、流れる沢が聖の沢と名付けられたものであろう。

元來、聖<sup>ミコト</sup>のじりの意味は前述の如く、高僧、僧侶、天皇と言つた意味であるが、聖を頭に冠した、聖あんどん、聖まど、聖棚と言ふ言葉がある。昭和の現代ではほとんど聞かれない言葉である。此の古語と聖岳との関係を見るのと、解が得られるのも面白い。興味をそえる意味で、聖岳の名称解決の鍵が、安女郎<sup>ヤメシラ</sup>であるとは一寸驚かれると思う。

今は無いが昔、赤練以前の色街の公  
娼の中、値段の安い女郎は、聖女郎セント・ガールと  
も呼ばれてゐた。聖なるお女郎と言う  
意味ではなく、聖窓にゐる女郎と言う  
意味で呼ばれてゐるのである。この聖窓  
とは、聖あんどん、聖棚と言つた固有名  
詞と同じ様に使われていたものであり  
、角張つた出張つた窓、角型のあん

どん、上又は下方に角型に突出した遠い棚の一種、をそれ／＼呼んだものである。この顔見世用の出張つた角型まどや、角型のあんどんを何故に、聖と呼ぶかとの疑問が出て来る。形は角張つて、上辺又は下辺が平坦な姿のものを聖と呼んでいる事だけは判る。

天子、高僧の座る所を、聖の座と呼ぶ、判り易く考えると、桃の節句のお雛様は高い畳の座に座っている。あのの畳を重ねて高くした様な、マットレスが聖の座であり転じて、そこへ座る事が、聖とあがめられる様になった人を

聖の座につくと、表現している。

角張つた長方形の型、丁度、聖の座どうやら南ルプスの聖岳の発祥はどうか、  
マツトレスに類似した山の形の聖岳  
であつたので、初めの中は多分、  
の座に似た山の形の山として、聖を  
とつて、山名につけたのではあるまい  
か。山の形から聖岳の名を考えたのは  
か。山が小生が初めてかと思う。(未完)

◆アラスカ通信◆

H. Adams Carter 465

今年も日本からは海外の各地に登山隊が出て、それぞれに立派な成果を得てゐるようです。また情報をお願いします。息子のピーターは今、ハーバード大学の夏休暇を利用し、ドイツの製紙会社でアルバイトをしながら、ドイツ語の勉強をしています。

日本隊が西稜経由で Hunter (441  
三)の第三登をやりましたね。

【(註)・第1登・July 5, 1954 (Fred Beckey, Heinrich Harrer) 第2登・July 31, 1963 (John Vincent Hoeman, Thomas Scribner Choate, David Perry Johnston) 第3登・June 20, 1966 (日本隊)】

第4巻を御存知ですか。日本隊が登場した翌年六月二日に、私の隊に属していた Donald S. Anderson, Donald N. Anderson (the names are correct) の二名が、トモシトナ水から北東面、北東稜線由で頂上に立ちました。このルートは非常に難しかったです。

(因みに東方からの航空写真で、ハンターとフォレーカーが両方あり、而も“大学ルート”が瞭きりわかるのがAAJ 1955 である)。

私達は Mt. Russel (3557 m) に挑もうと思い Yenta 氷河の上部に着陸パツとしない天気の中で順次テントを

高所に建設して行き、最後に晴天下に来たので青水と急斜面の上にて固定網を張りながら、頂下三五〇mまで迫りました。しかし又荒天に見舞われ一時退却。〇〇kmの烈風が三日続きました。お陰で三張りのテントは全部吹き飛ばされ私達は布切れの下で難を避けていました。が、それも雪に没し、四日目になつてやっと来た中だるみを利用してB Cへ逃げ帰りました。こどもも一二日間吹雪かれ通してした。積雪三m。これで遠征は終了しました。

尚 Boyd Everett はカナダの最高峰ローガンで、難しい新ルートを開拓しました。彼は、キング峰の西稜を登り、最高峰(6060 m)まで縦走しましたが、これには日数二九日、高所キャンプ一二を要しました。

Richard  
Goody & Don Morton の二名が、  
ブランカ山群は Alapasco 谷で五八  
〇〇m の峰の初登攀をしたそうです。  
前者はハーバード大学の、後者はプリ  
ンストン大学の教授ですが、両者の協  
力で、あの附近の立派な地図をつくっ  
たといわれています。

八月十三日、02185 以下  
吉沢一郎様

【注・参考のためにForaker (5303 m) の登攀記録を記しておく、

第1 登・August 10, 1934 (Charles S. Houston, T. Graham Brown, C. Waterston)

第2登・July 7, 1963 (Jeffrey Duenwald, James Richardson)南庫  
稜による新登頂。隊長は H. Adams

Carter (吉沢)





# 青年の時から 今への山やま

No. 1621

塩田 輔雄

(明治三十八年生)

私の住んでいる西岡というところは札幌の羊ヶ丘展望台に続く高原で、家の前からは、若い時に登った数々の山が、素晴らしい姿で打続いているのが見える。

未知の山々に、笹を分け、谷間を攀じ、道松を滑り抜けて頂上に達し「ああ、雄大な自然」と感激に満ちた時代それはすでに遠い昔であり、われわれ年代の生れものは、まこと、明治は遠くなりけりと、痛感するこの頃である。

然し山は今でもそこにある。無意根山、札幌岳、空沼岳、恵庭岳、百松沢手稲山。遠望する夕張、芦別岳、暑寒別岳。

朝な夕な、私はこれらの山々を眺めて暮す。古い山友とあう。彼も健在である。会報の上でいろいろの人の消息を知る。ああ、君も又達者でいるかと心嬉しく思う。

だが時代は移る。恵庭、手稲が冬季オリンピック（一九七二年）の会場となり、世界の若者が雪煙をあげるという。

会員の方々の健在を祈り上げます。  
(八月十二日)

× × × × ×

## 『北沢基幸氏』

### の憶い出

岩 永 信 雄

北沢基幸氏の逝去を知ったのは昨年秋頃神谷さんから伺ったのであるが其後最近の山岳会々員名簿にもそのまゝ

掲載されており、冠さんともその話をした。何が間違ひではなかつたかと思つて何となく割切れぬ気持でいたがこの間六義園で催おされた懇談会の時に詳細を承り又会報での赴報を得て驚き入り深く哀悼の意を表し御冥福を祈る次第である。

北沢君と私の交りは六十一年にも近づき、在浪時時代の近所であり学校の先輩でもあった関係で小学校時代から度々お宅にお邪魔して来た。その頃は山々に対する憧れも殆んどなく夏は水泳その他の季節にはローラースケートと行も共にして楽しみ、お宅では「山岳」やその他の写真を見せて戴き日本にもこんな立派な山があるのかと驚き愛着をもつようになり私の山キも最初は同君及び当時会員102号の忽清谷安美君におう所大であつた、勿論明治大初期のこととて記憶も殆んどなくはつきりした事は忘れてしまつたが、この頃横浜山手グループに於けるウェストン師の「日本アルプス旅行談」及び其後横浜記念会館に於ける辻村伊助氏の「スウイス山旅」の名講演には同君等と同行し、後忽清谷君から「君がそんなに山が好きなら「山岳」全部貸してあげよう」と云われ主なる号を借用して現在に及んでいる。北沢君も「山岳」を全部製本保存され他小島氏の「日本アルプス」等その頃の山岳書を殆んど愛蔵されていた、又高野氏編集の「高山深谷」全部や会員作製の「立山図幅」立体模型も所有されていたが、関東大震災のため全部灰塵に帰せられたのは惜みても甲斐なきことである。

同君は山岳会創立と同時に率先入会され今日及び会員番号十二号で最古者であると思う。私が入会をお願い致した所同君及忽清谷君の推薦を得、大正七年八月八日第六十一号として入会を許可され、旧会員章を所持しており後新会員章となり、第二十八号となつたの

である。その後同君を通じて高野、小島両大先輩にお近付きを得た事を感謝している。

私が同君と最初に同行したのは大正初期富士登山であつた。その「洞蔭亭士」の説明など今に忘れることが出来ない。それから伊豆修善寺から伊東にでて暫らく海水浴を楽しみ大室山にハイキング登山も試みた。又アイスクリームもよくせられ元体育会会長元会員50号平沼亮三氏とも親交あり諏訪湖にも度々赴かれた。私も之を楽しみ下諏訪に滞在してその時鉢伏山にカンジキ使用して雪中登山したことがあつた。震災後は横浜根岸に居住されて以来私も東京に移り余り会合する機会を得なかつたが山岳会の有志晩餐会には度々出席され、又「山岳」刊行の二十五周年記念号には執筆され、昭和六年七月四日在浪有志晩餐会開催時にも一方ならす尽力された。「山岳」第二十八年三号前後も時々お宅を訪れ山岳会の近況等を語り又有志晩餐会等の件につきお話ししていたが実現を得ず今日に至り残念に堪えない。

同君は学校時代から軟式庭球選手として活躍され卒業後も進んで母校庭球部のコーチを任せられ後輩を指導されより習得されて家族等と赤倉等に行かれていた。

写真も明治時代より研究され山岳写真もゴルトツ会社製ダグロ鏡玉カビネ組立器機をもつて日本アルプスを撮影し、密着写真十数枚に於いて望遠してカビネより出して見ても少しの変色もなく往時の日本アルプスを現出しており想出深きものがある。

君は純情篤実明朗世事に拘泥せず自適の人生を送られお至極健康であると思つておられたが、今度の訃報に接し深くお悔み申上げます。

## 野中至翁・晩年の 富士登山

永原 輝雄

昭和の初期、国際気象台長会議の結果、我が国では富士山頂に、測候所を設置する事に決つたが、それ以前にも山頂に測候所を設けて冬期短期間の観測を行つて来た。ところがかの室戸台風の来襲に刺激され、台風予知に高山気象観測の重要性が再認識されて、気象台では、それまで臨時の測候所を改築して、観測の充実をはかる事となつた。

昭和七年剣ヶ峰に建つた、その新築工事中の或夏の日のこと、登山者が大勢行き交う中、六十を大分過ぎた老人が、職人に混つて建物側面のペンキ塗を手伝つていた。

その傍に腰を下して休んでいた相当年輩の登山者が同行者に「昔野中至といふ人が、この富士の頂上に小屋を作つて滞在、寒中の気象観測をした事があつたよ。福島少佐の車騎シベリヤ横断、郡司大尉の千島探検と共に、当時は三英雄と、世間で騒がれたものなんだ。その後あの野中さんほどだつておられるだろ。或はもう年だからなくなつたかも知れない」と独り言の様に話していた。

その話をそばで聞いていた、先の老人は微笑笑を顔に浮べて、黙々とペンキの刷毛を動かしていた。その老人こそ、野中至翁が富士山の英雄であつた。野中至氏の晩年の姿であつたのだ。

これは私が十六ミリの冬富士の撮影ロケで登頂した時、協力して頂いた広瀬源氏に伴われて、下山後平塚在住の野中至翁を訪れた時、亡き奥様の写真を飾つた室で、翁から直接聞いた思出話である。明治二十八年の冬季滞富士に、三十七年後に、翁が忘れ得ぬ富士に、再び登つた経緯について、こんな

因縁話があつたのだ。これより先に野中翁の二番目のお嬢さんが、気象台の菅原芳生技手の奥さんになられた事は、一応世間においてあらちの縁としていつけるが、山頂測候所が出来たに於いて、その初代所長に同技手が任命された事は、あなたが偶然とばかりはいえないかも知れぬ。新所長は測候所建設の監督として、滞頂するに際し、岳父である野中翁を山頂に招き、新しく出来た測候所を見て貰おうと、翁を誘つたところ、喜んで老体に鞭打つて登頂された由。四十の昔、自費で粗末な小屋を建て、不完全な装備と、乏しい食糧で、單身冬季滞頂している夫の労苦を偲び、千代子夫人は、その安否を気付かつて後を追ひ、女の方で、水雪の富士に登つて来たのであつた。初めは無謀を叱つた夫ではあつたが、そこは夫婦の間柄で、互いに励まし合ひ、何度目張りしても、直ぐにはあきらめられ、小屋のすき間風に悩まされ乍ら、高山病に冒され、日々衰弱する軀を押して苦闘を続け、貴重な観測に幾月かを過したのである。翁は今こゝに、近代科学の設備と、立派な測候所の建物がある、ほぼ完成するのを自ら眺め而もこれがわが娘婿の栄えある職場である事を思えば、感無量、空しく眺めてばかりはおられない衝動にかられて、自らペンキの刷毛を握つた翁の心境は、青春の血に燃え、死の危険を冒して登頂した時に比べ、如何に楽しいものであつたらうと、想像するに難くない。

古来の宗教登山は別として、スポーツを含む近代科学登山の面から見れば、野中翁は冬富士の開拓者である。翁の科学の使徒として富士によせたあの情熱と、夫人の内助をたゝえるため私は予てから剣ヶ峰の野中小屋跡に記念碑を建ててその事を夢に描いている。気象関係者、登山団体等の賛同を得られれば本望である。

1966 年, 4 月号



Pucahirca 北峰 C<sub>2</sub>, C<sub>1</sub> 間のルート。先頭で左足をあげているのは、Edelweiss 隊が連れていったパブロである。(1961年一橋隊軍)

四月号はソ連の登山に関する特集号で、表紙にはコーカサスのウシュバ山の写真が掲げられている。内容は次の通り。

○ 連の登山史について  
一八二九年のキール・ハシコフによるコーカサスのエルブルース東峰登山から初まる連の近代登山史。一九〇〇年前後のコーカサスの町にスポーツ登山家の一派が出現し、その頃、最初の登山のクラブがチフリスやモスクワに生まれた。そして一九一七年の革命以後、登山が一般化し、一九三〇年代の輝かしい初登攀時代を迎えた、とある。最後に現代の連の登山家六〇名の「スポーツマスター」写真がのっている。

○ 登山の発展のための根本問題

る。ソ連では山が遠くにはなれている。で時間の問題は特別な意味をもっている。一年のうちの限られた休暇と学校の休みを利用して。最後にお金の問題・装備・食料・滞在費、これらについては労働組合が労働者に援助してくれる。労働組合が多くの山小屋を立てている。そこでは装備品や食料宿泊所が提供される。費用の七〇％は組合が払つてくれ、登山者は三〇％だけ自分で負担すればよいという。

○ ソ連の山々について

ソ連の巨大な領土は森林や山岳地帯に富んでおり、限られた紙数の中で詳しく全部を説明することはできないが、コーカサス・パミール・天山・アルタイの山について写真入りで紹介している。

コーカサスの山々は全世界に知らわたっている。黒海とカスピ海の間にある。その主脈は丁度東西に伸びていて。最高点は五六三二メートルのエルブルースで一八二九年に登頂された。コーカサスには技術的に困難なルートや易しいルート、岩・雪・氷とバリエーションがある。ここには登山学校があり、夏や冬は登山者やスキーヤーでいっぱいになる。西部は森が多いが中部は森がほとんどない。コーカサスのルートは意欲的な山々の友を満足させてくれる。二つのピークをもつウシュバ山、岩のシェヘル山の北壁・氷のドングイス・オルン・拒絶するようなチャツイン・タウは第一級に数えられる。ジョン・ハントが「ペゼンギ」の山域はルートの特徴からいっても登山条件からいってもアルプスよりもヒマラヤに近くいっているのは正しい。一三キロメートルの長さの威圧的なペゼンギの壁の頂上やコシュタン・タウ・ディフ・タウ山脈は五〇〇メートル以上であり年々登山者を引き寄せている。

ツェイ谷やドンバイにも多くの登山者が入っている。ドンバーク・ウルグチ・チャンチャイとドシバクトのルルユチヤットはむづかしい山である。コーカサスにはもはや未登頂の山はないが永らくそれらの山の登頂は不可能であった。多くの知られていない東コーカサスの山と、岩の露出した北側に平行している山脈と、南側の支脈があるのでコーカサスはまだ何年かはソ連の登山のブレイグラウンドとなるであらう。

パミール・天山・アルタイについてもこの程度に述べられているが省略。

その他にも、ソ連におけるグレーディングについて、ソ連登山連盟について、ドイツ人からみたソ連の登山について、ドンバイウルグチの遭難とその救助について、等々、ソ連の登山界の話題が豊富に語られている。

1966 年, 5 月号

四月号の「ソ連の山特集」に引き続き、五月号はアイガー特集となっている。カール・メルツンガーやヒンターシュネイトイサーの挑戦からヘックマイヤー一連の初登を経て今日に到るまでの「歴史」トニー・ヒューベラーの「メモ」ギド・トネラの「アイガー北壁ディレクティブシマ論」ペーター・ハーグの「ディレクティブシマ・イデー」イェルク・レーネの「メモ・ジョン・ハーリン・ルード」その他、ジョン・ハーリン、ヒルディ・フォン・アルメンの追憶等々、アイガー北壁に関する興味深い読物がズラッと載っている。

中心になっているのは、今年三月の米英独ディレクティブシマ隊による北壁登頂である。この隊はアルプスに於いては新しい形式である遠征隊形式の登頂に成功した。二月から三月にかけて

一覽

三十一日、間イギリス人、フランス人、ドイツ人計十一名でハーケンを合せて五三〇本打ちこみ、全長一六〇〇メートルのザイルを壁にかけ、合計二万マルクをアイガーの登頂に費した。登頂したのは五名である。

このような遠征隊形式でデイレッテイシマであるか否かにつき、ヨーロッパでは賛否両論議論の花が咲いているとのことだが、このような議論に対して五月号は、有益な示唆を与えている。ちなみに「デイレッティシマ」とは、短時間に最少の危険のもとに於ける最短の「処女ルート」を意味するといわれる。ベーター・ハグが最初のアイガー・デイレッティシマ論者であった。

＜單行本＞

|                        |                |                 |
|------------------------|----------------|-----------------|
| 書名                     | 著者名            | 受入生             |
| 日本地名發音                 | 日本放談協會         | 入               |
| 辞典・第一集                 | 東山越 (1,700円)   | 人               |
| 義一・日高に<br>通ける登山者       | 義一堤内録<br>編集委員会 | 沢田<br>巳之助       |
| フエデスから<br>レミヤヤへ        | 早大山岳部          | 著者              |
| あるガイドの<br>手記           | 佐伯富雄           | 著者              |
| 「難読」                   |                |                 |
| 岳人                     | 1966-6 No. 221 | 東京中日报社          |
| 7 No. 222              |                |                 |
| アルパ                    | 1966-5 No. 99  | 創元社             |
| 6 No. 100              |                |                 |
| OMC<br>レポート            | 1966-5 No. 198 | 奥多摩<br>山岳会      |
| 会報                     | 1966-6 No. 79  | 山学同志会           |
| 東海山岳 No. 2             | 1965 JAC東海支部   |                 |
| 復刊1号                   | 東洋山岳部          |                 |
| 誌                      | 1966 No. 1     | 北海道自然<br>保護協会   |
| 理工学研究会<br>(「フランス報告調査」) |                | 同志社大理工<br>工学部研究 |
| ×                      | ×              | ×               |

あなたの**ネガ**から、大型パネル（枠）張り

お部屋の飾りに！ 贈りものに！

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング（構図）で、大型・美麗・パ  
ネル張り写真を製作いたします。  
ネガと返送料150円同封でご注文下されば  
到着後5日以内に製作発送いたします。  
代金は着品後 10 日以内にご送金下されば  
結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊  
社で負担いたします。また、特にトリミング  
をご希望の方はその旨明示して下さい。  
但しネガ不調のため作品にご満足頂けない  
と思われる場合には、ネガ、代金、返送料と  
もそのまま直ちにご返送申し上げます。

- |                  |       |         |
|------------------|-------|---------|
| ■全紙半切            | パネル張り | ¥ 1,000 |
| ■全紙<br>(新聞1ページ大) | "     | ¥ 1,500 |
| ■全紙2倍            | "     | ¥ 4,000 |

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。





# 會員通信

◇ 初秋の候益々御清栄の段お慶び申し上げます。

さて今般の日本グルジア友好登山につきましては一方ならぬ御援助をいただき厚く御礼申し上げます。

私達日本グルジア友好交流登山遠征隊は去る七月十九日よりカフカズ山群登攀のため遠征致して居りましたが八月三十日所期の目的を達成し無事帰国致しました。

略儀ながら取り急ぎ御報告致します。

昭和四十一年八月三十日

日本グルジア友好登山協会  
横 浜 山 岳 会

## シアトルより

残暑御見舞申上げます。僕らのアラスカ、カナダでの山登りを総て終りました。アラスカではハンターとフォレカールの第三登に成功しました。後者は新ルートです。下山はカヒルトナ河を一週間でタルキトナに出ました。その後はカナダ・ロッキーに入り、Robson (12,972 ft., 3,954 m), Edith Cavel (11,033 ft., 3363 m), Columbia (12,294 ft., 3,747 m) の三山に登りました。

8/28 シアトルにて 錦織英夫 (吉沢宛)

## 十勝三股にて

貴会益々御発展をお祈り申します。小生は今夏山行として、北海道へまいりました。今回は今まで残された山々を歩き度く考えておりますが、毎日雨天で思う様に行かず気になります。今日まで日高幌尻岳、ニベソツ山を踏破しました。今後石狩岳、ウベベサンケ山を考えています。今夜も雨です。

晴天であれば完了して帰る予定です

(八月十八日付、本会宛) 尹 官 炳

◇ 謹啓 晩夏のころとなりましたが、益々御清栄のことと存じます。

かねて絶大御支援を賜わって参りました本会のアフガニスタン・ヒンズークシ登山隊は、去る七月二十八日、目的の Koh-i-Bandakor (6,660 m) 登頂に成功することが出来ました。これも偏に御貴台のあたたい御力添えの賜物でありまして、ここに深く御礼申し上げます。

尚、登山隊は次のように三隊に分れて帰仙致します。御礼等々お知らせ申し上げます。

## 記

敬具

本隊 (板橋・加藤・佐々木郁・寺島・黒瀬・佐藤弘) は八月二十九日、十二時三十五分 (第一ひばり) 仙台駅着。尚、四方田・佐藤武志 (二名) は、八月三十日、インド航空にて羽田着。松倉・佐々木節朗・入賀 (三名) は九月十日頃羽田着。

昭和四十一年八月二十四日

仙台市青町二九

東北学院大学山岳会

幹事長 常盤一雄

AC and Arnold Lunn

AJ, 1965-1, "A Word for Whimper" という長文の記事が載っている。ランが去年出した "Matterhorn Centenary" を手ひどく攻撃しているものだが、次号にランが反論を出すというところであるから、それを読んだら考えてみた面白と思う。要するにランには偏見が多い、というのである。近く誰かの手で邦訳が出るらしいが、ランの書いたそのままで出版するのは意味がない。よく研究して読者に親切なものであって欲しい。

## 編集後記

会報への原稿はどんな種類のものでも、一まず日本語なら一字、横文字なら二字として頂きたい。や、や「が」一字に数えられることはいうまでもない。旅信などは別として、便箋などにいい加減に書きなぐった原稿をみると、全く処置なし。能率をあげるにはまず、こうした基礎的な事から御協力ありたい。特に図書関係の原稿がひどい。一段一行には和洋で何字入っているのかよく研究してもらいたい。(吉沢一郎)

昭和四十一年九月十日発行

東京都渋谷区神宮前  
三ノ三 一 外苑コーポ内

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 吉 沢 一 郎

頒価五十円

電話 (総) 六五〇一、七  
直通 (総) 七六五七

振替口座東京四八二九番

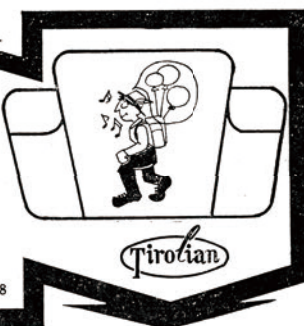
印刷所 東京都港区赤坂堀池五番地  
株式会社 技報堂

登山における  
人体工学追求の  
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー  
キスリング  
株式会社 サクライ

TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8



## ☆ 会報製本御引受け ☆

製本代 (201号~250号) 金 600 円也  
送 料 別 受 け

## 中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端 2~15, 電話 (943) 0311 (代表)

大阪店・都島区相生町 7, 電話 (352) 3491 (代表)

名古屋店・昭和区雪見町 1~15, 電話 (731) 7331 (代表)

工場: 大阪工場 (堺市), 東京工場 (戸田町)

▶ 背文字その他については往復はがきで  
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい